



当院における認知症患者の BPSD に対する抑肝散の有効性に関する調査

當山美奈子¹⁾

1) 渡辺病院

1. はじめに

近年、レビー小体病の幻視に対して抑肝散の有効性が報告されている。一方、レビー小体病にかかわらずアルツハイマー型認知症、脳血管性認知症においても BPSD がみられ介護者の負担になりやすい。とりわけ軽微な BPSD に対してリスペリドンなどの非定型抗精神病薬を使用すると有効性に比して有害事象が多く認められ、そのため、より有害事象の出現が少なく BPSD に対して有効な薬物治療が求められる。抑肝散は従来より小児の夜鳴き・疳症に用いられており非定型抗精神病薬にありがちな錐体外路症状を惹起しない。このため私たちは認知症と診断され初期に出現した BPSD に対して抑肝散による薬物治療を行ったところ良好な結果が見られたので若干の考察を加えて報告する。

2. 方法

対象 22 名(男性 6 名 女性 16 名 施設 6 名 居宅 13 名 入院 3 名)、平均年齢：81.5、改訂長谷川式簡易知能検査：13.2 主病名：アルツハイマー型認知症 15 名、脳血管性認知症 2 名 混合型認知症 1 名 レビー小体病 4 名 主な症状：易怒性、幻覚・妄想、不安・うつなどの BPSD 上記患者 20 名に抑肝散 5 g～7.5 g を投与し、居宅・病棟での生活状況を観察した。評価方法としては、投与前の介護の負担レベルを、0 (負担なし)～50 (かなり負担)～100 (最大の負担) とした 10 段階に分類し、介護者の全般的な印象をもとに評価

し、投与前後の介護の負担レベルの点数の変化をウイルコクソン符号付順位和検定を用い解析した。

3. 倫理的配慮

研究の趣旨を当院倫理委員会に申請し、許可を取得、対象者本人、ご家族に研究の趣旨を口頭で説明し、その旨を診療録に記載し、本調査において、個人情報と同定されないように留意した。

4. 結果

投与前の介護負担レベル 73.9 であった。一方、投与後の介護負担レベルは、45.9 であった。その結果、投与前後のレベルに有意な減少がみられた ($p=0.007$)。しかしながら入院加療を必要とした認知症高齢者 3 名の BPSD に対しての有効性は認められず中止となった。有害事象に関しては、投与後、血液検査で低カリウム血症が 1 名みられたのみであった。

5. 考察

認知症性高齢者が初めて BPSD を認めた際、第 1 選択薬として抑肝散を投与することは、有害事象をほぼ認めることなく介護の負担レベルを軽減し、有用であることが解った。しかしながら、入院中の認知症高齢者の BPSD には明らかな有効性が認められなかった。このため抑肝散は施設・居宅における認知症高齢者の BPSD に有効性があると考えられた。

